



SPIRITS OF
YLH (123)

「平成牛麓舎」は、この時代・社会の中で、
何を指そうとしているのか(上)



高梁市図書館前の方谷像

この2月13日(土)に、岡山県高梁市で、「山田方谷先生生誕205年記念フォーラム」を開催したことについては、すでに、本誌3月号でご紹介をした。

このフォーラムの最後には、私から一つの提案を行なった。それが、「平成牛麓舎」をこの春に立ち上げようということであった。

方谷先生は、34歳(数え年)の時に、家塾・牛麓舎を開き、藩内の人材育成に当たられた。その後、50歳を過ぎて備中松山藩での仕事を終えてからも、長瀬や小阪部で家塾を開き、広く国内の若者たちの育成に当たった。明治6年、69歳の時は、備前藩の藩校であった閑谷学校が荒れ果てていると聞き、その再興のために立ち上がり、亡くなる直前までその教鞭を執られた。

私はそんな先生の教育への強い情熱、国家社会への責任感などに感謝をささげ、敬意を表して、この平成の時代に、改めて「牛麓舎」の精神を復活させてみたいと考えた次第である。

この提案を行なった段階では、本誌先月号でも書き記したとおり、以下の諸点を柱とする形で、高梁市の中心の方々にご提

案を申し上げた次第である。

- ①方谷先生の「治国平天下」の理想を足場とした活動を行う。
- ②高梁市内のみならず、広く他の地域の人たちにも参加を呼び掛ける。
- ③運営費用は、地方政治などからの独立性を保つため、市などの補助金を当てにするのではなく、独立した基金を作ることとする。
- ④(小野)自身は、春と秋に一週間ずつの講座を担当する。 (以上)

本稿では、もう少し詳しく、この「平成牛麓舎」を立ち上げようと考えた基本的な考え方を整理しておきたいと思う。

まずは、この「平成牛麓舎」を立ち上げんと考えた社会的背景について語っておきたい。

平成の時代は、この年号に込められた願いは裏腹に、年とともに混迷の度を深めている。それがいかなる理由によって引き起こされてきているのか、思いつくまに以下に5点を取り上げてみたいと思う。

1. 世の中にまん延している人間観が、あまりに即物的・即時的であり過ぎて、人間存在の意味や価値への洞察に欠けてしまっている。したがって、そこから生まれる社会観や国家観、文明観といったものも、きわめて浅薄なものであり、あまりに単純化された効率論や、優勝劣敗的な考え方に足場を置いた進化論のようなものが基本となっている。つまり、人間不在の考え方に基づく形式的なものに随してしまっているという気がして

ならない。

それは、人間が生まれながらに持つ長期的・総合的・根本的な視点から生まれるはずの力を自らで否定するものとなり、人間の力が十分に発揮されていない社会を生み出しているのではないか。それが、現代社会全体に、活力低下を招いている大きな原因ではないかと思う。

2. 時代や社会があまりに激しく変化しているうえに、さまざまな地域からの雑多な情報が断片的に伝わってくる時代であるだけに、この時代や社会をマクロにいかにとらえ理解すべきかという点について、きちんとした視座を確立できないでいる人がとても多い気がする。これは、政府諸機関やマスコミなども同様であり、即座に社会的合意が形成されないものについては、自らの定見を表明することを避ける傾向が年々強まってきている印象である。

その結果、多くの人々が時代観や社会観を形成できず、そのために自分がここで何を為すべきかがわからず、途方に暮れ、また風の間に間に、波の間に間に吹き流されるままに自らの身をゆだねて生きる傾向も強まってきている。

この種の生き方は、定見のない生き方であり、夢も持てず、希望も持てず、という言葉はこの人生姿勢から生まれてきているものではなかろうかと思う。日本社会の混迷は、こんな心の側面から生じてきているということに思いを致さなければならないだろう。

3. 以上、①と②で述べてきたことに関係するが、個人が、この時代・社会の中で、自らの信念に基づいて、我何をいかに為すべきか

ということが、必ずしも明確になっていないという基本問題がある。それを乗り越えるために、私は、“夢出せ！知恵出せ！元気出せ！”という言葉を広く世の中に語りかけているのであるが、その時に、多くの人たちが、ならばどうしたらいいのだろうかと困った顔をするのである。

これまで自らの主体制を確立するという教育を受けてこなかったせいなのだろうか。応用問題を自分自身で解いて具体的な方法論を作り上げる能力と覚悟を欠く人が多いというのが率直な思いである。ただ、この部分は、個人個人が創意工夫しつつそのイメージを描き出し、また体系化すると同時に、自らが汗を流して動いてゆく必要性のある分野である。したがって、一日の教育でこの目標が達成できるわけではない。

そこに、パブリック教育としての基本的な問題がありそうである。



方谷が教鞭を執った蒲校の跡地

4. かつての日本では、“向こう三軒両隣”などということ言って、隣組同士で家族同様

に助け合い、励まし合うという相互扶助の考え方に基づく取り組みが、当然のごとく行われてきた。しかし、今の日本では、隣に住む人の顔さえ知らないというまでの状態になってきている。地縁のみならず、血縁も、または会社の中での職縁も、どんどんと希薄化し、さらに家庭の中でさえ、一人一人が孤立化するまでの事態となってきた。

この相互扶助の意識が薄れ、その具体的な仕組みも失われていこうとする中で、人々は、将来への不安感を募らせると同時に、行政への依存度を高め、その公平性を担保するためか、社会全体が形式化・硬直化してきている。人と人の心の触れ合いや響きあいということも少なくなり、精神的活力の源泉が枯渇し始めている気がしてならないのである。

それは、日本社会全体に精神面の疾患を広げ、「社会的病理」と通称されるものを広く伝染させているのではないか。

5. 最後に指摘しておきたいことは、日本社会では長い間、リーダー教育が平等社会の理念にふさわしくないという理由からか、あまり力を入れてなされてこなかったというばかりか、逆に、忌避される傾向が強かったということである。

もう30年近くも前の本であるが、「日本の自殺(PHP)」という本の中に、こんな一文が出てくる。

「エリートが精神の貴族主義を失って、大衆迎合主義に走るとき、その国は滅ぶ。政治家であれ、学者であれ、産業人であれ、あるいは労働運動のリーダーであれ、およそ指導者は指導者たることの誇りと責任とをもって言うべきことを言い、なすべきことをな

さねばならない。たとえそれがいかに大衆にとって耳の痛い、気に入らないことであつたとしても、またはその発言と行為ゆえに孤立することがあつたとしても、エリートは勇気と自信を持って主張すべきことを主張せねばならない」と。

戦後の日本社会では、エリートといえ、高い地位について国民を下げすみ、同時に高い給料やさまざまな特権を得ている人種と見る傾向があり、忌み嫌われる言葉の一つであつたかと思う。しかし、実際は、重い義務と責任とを背負い、常に自らを高めんと努め生きる人であるはずだ。そんな人を育てようとしてこなかった日本社会が、混迷の時代に入り、その活路を見い出せないで苦しんでいるのは、ある意味で当然のことであつたかもしれない。

以上、5つの点について、この日本社会が抱えている基本問題について、論じてみた。これら問題の解決には、技術教育という限定されたもの教育ではなく、広い意味での教育の視点を多くの人が共有することが求められる。この広義の教育を語るならば、すべての問題解決の道がこの中に内包されてくるものである。

そこで、私は、「平成牛蒡舎」の活動の中で、これら課題解決を導く教育の姿をひたすらに模索し、そのモデルをこの活動の中から作り上げてみたいと考えているのである。

その具体的教育内容などについては、次号においてお示ししたいと考えている。ご意見や、御提案をお聞かせ頂ければ幸いです。

(3月14日執筆)